

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その四)

海老沢 敏

三、小学唱歌集《見わたせば》(承前)

音楽取調掛はこうして《大演習》すなわち公開発表会をもよおし、唱歌教育の成果を世に問うたのであった。その両日に《見わたせば》が紹介されているのが注目される。第一日にはこれは百十五名からなる《東京師範学校附属小学下等諸級生徒》により《箏胡弓合奏》(箏・山勢松韻、鳥居忱、胡弓・林蝶)を伴なって歌われ、一方、第二日には、《学習院生徒》百二十八名が箏(山勢松

韻)、胡弓(吉田キサ、加藤定)の伴奏で歌われたのである。

すでに紹介したように、この公開の発表会には当時の名だたる名士たちが多数参集したものであった。参考までにその主だった人たちを挙げておこう。皇族では北白川宮、東伏見宮、有栖川宮が、大臣では、太政大臣三条実美、右大臣岩倉具視、外務卿井上馨、大蔵卿松方正義、文部卿福田孝義、その他参議員副議長田中不二麿、東京大学総理加藤弘之、東京府知事松田道之、文部省御用掛西周、日報社長福地源一郎といった面々がビック・アップされるのである(遠藤宏著《明治音楽史考》一三二ページ—一三

三ページ)。

この〈大演習〉は、当然、こうした新しい唱歌についてほとんど知識をもっていない人たちの前でおこなわれたものであったから、解説、紹介の類が当然必要であった。すでに前章でも紹介されているように、伊沢修二がこの仕事を受け持ったのである。伊沢修二がおこなった解説は東京芸術大学付属図書館が所蔵する『唱歌略説』に伝えられている。

この手書きの解説はすでに引証した〈大演習〉のプログラムに添って、『洋風管絃楽』の〈太平曲〉および『ウエイルス国歌』の解説にはじまり、東京師範学校附属小学生徒唱歌十二曲とつづき、その次に、『見渡せば』、『春の弥生』等々と続いており、解説のない曲、プログラムと解説がくいちがった曲などが若干あるにしても、およそ順序も同じかたちをとっている。

この『唱歌略説』は、一月三十日と三十一日の両日をおおっているが、第一日のもので、伊沢修二の自筆稿、第二日は表紙だけが伊沢修二自筆であり、本文は写しとなっている。

この『唱歌略説』の『見渡せば』の部分の一部くりかえしになるが、全文再録してみよう。

一 見渡せば

○見渡せばあを柳花ざくらこきませて

都には路もせに春の錦をぞたてもなく

ぬきもなくさほ姫のをりにける

見渡せば山辺にハ尾上にも麓にもうす

きこき紅葉ばの秋の錦をば立田姫お

りなして露霜にさらしける

第一歌ハ以前音楽取調掛ニ出勤セシ柴田清熙ノ作ニシテ古

今集春ノ部ニ載タル素性法師ノ歌ニ「見渡せば柳桜をこき

ませて」云々トアルヲ句ヲ足シ意ヲ取りテ楽譜ニ合セタル

モノ也

第二歌ハ第一歌ニ擬シテ稲垣干頰ノ作レルモノニテ春秋ニ

季ノ景色ヲ取合セタルナリ

楽譜ハ佛国ノ学士ニシテ音楽ニ著名ナルルーソウ氏カ睡眠

中ニ作リタル曲ニシテ廣ク諸邦ニ行ハル、モノ也其意ハ雅

正婉美ナル感情ヲ暢フルモノナリ」(図版①)

馬場氏によって指摘されているように、この〈大演習〉用解説に使われた『唱歌略説』には、異稿がある。馬場氏が「上伊那稿本」と呼んでいるものである(馬場健『伊沢修二と小学唱歌集』—根拠を欠くカッソウ作曲—四三ページ—四四ページ参照)。

このいわゆる「上伊那稿本」は、信濃教育会編『伊沢修二選集』
〔信濃教育会刊〕にも収められ、かつ馬場氏の手によって『音楽教
育研究』（第十六卷第二号・昭和四十八年「一九七三年」二月号）
の『資料特集『唱歌教育』の歴史』にも掲載されている。「上伊
那稿本」は、第一曲君が代にはじまって第六曲螢の光に終る「唱
歌略説 第一」〜と第一曲蝶々、第二曲見渡せば、第三曲春の弥生
の三曲を収める「唱歌略説 第二」からなり、『小学唱歌 初編』
の収録曲を中心に解説がおこなわれていて、末尾に「右者明治十
四年五月二十四日、皇后宮の東京女子師範学校に行啓の際本科生
徒及小学生徒の唱ふ所の歌曲の条理を略説せるものなり」と記さ
れているものである。一方「東京芸大稿本」の末尾にも「右ハ明
治十五年一月三十日及三十一日ノ兩日ヲ以テ音楽取調成績報告ノ
節取用セシ所ノ音楽及唱歌ノ条理ヲ解説セルモノナリ」と記され
ていることから、「上伊那稿本」が初稿であることがたしかめら
れる。

『見せば』の歌詞は説明の通り、『古今集』の中の素性法師の歌
を、国文学者であり、かつ音楽取調掛履であった柴田清熙きよひろならび
に稲垣千頼ちかたかが楽譜に即して作り直したものであるが、『小学唱歌
集 初編』に掲載された最終稿とはいくぶん異なっている。第一
節では「たてもなくぬきもなく。さほ姫のをりにける。」が「さ

ほひめの、おりなして、ふるあめに、そめにける」となり、第二
節では「立田姫おりなして。露霜にさらしける。」が「たつたひ
め、おりかけて、つゆ霜に、さらしける」と修正されているのが
それである。

ところで、この論稿の主題と関係ある「ルソー作曲」について
は、「上伊那稿本」もほとんど「東京芸大稿本」と変りはない。
『楽譜ハ佛国の学士にして音楽に著名なるルソー、ウ氏が睡眠中夢
に作りたる曲にして広く諸邦に行はるゝもの也其意ハ雅正婉美な
る感情を暢ぶるもの也』（傍点筆者）ルソーの表記のちがいと「夢
に」が加えられているだけである。

『見渡せば』が「ルソー作曲」という説明は、前述の「大演習」
の折に伊沢の口から当然おこなわれたものと考えられるが、以
後、このような小学唱歌とルソーの結びつきは、一般にはほとん
ど忘れ去られてしまったものと思われる。なぜなら、明治十年代
のなかばという時点にあって、ルソーの名は我が国ではほとんど
まったく知られていなかったからであり、やがて述べるように、
讚美歌のかたちでこの『見渡せば』の旋律が歌われつづけたとは
いえ、ルソーの名と結びつけられるにいたったのは、もっとあと
のことであり、また次のような事情もあったからである。

伊沢修二自筆および筆写された「東京芸大稿本」の『唱歌略説』

は、この〈大演習〉の折に、本人によって紹介されたあと、東京音楽学校の書庫に収められたままなんと半世紀以上を経過し、昭和十四年（一九三九年）におよんで、ようやくふたたび日の目を見るに及んだのであった。すなわち、遠藤宏氏が、昭和十四年の夏、東京音楽学校の蔵本の虫ほしの機会に、この〈貴重な史料〉を発見し、翌昭和十五年（一九四〇年）に、東京音楽学校校友会雑誌〈音楽〉第二〇号にこれを発表して、ようやく、この伊沢修二自身によるヘルソー作曲の説が一般にひろく知られることとなり、遠藤氏はさらに後年、これを〈大演習〉のプログラムともども、〈明治音楽史考〉に収録したのであった。昭和二十三年のことである。

明治十年代のなかにはジャン・ジャック・ルソーの名前が日本ではほとんどまったく知られていなかったことは、中江兆民によるルソーの翻訳がようやくこのころおこなわれたものだったことからも理解される。中江兆民が〈社会契約論〉の一部を訳し、これが筆写され回覧されて読まれたのは明治十年（一八七七年）ごろからであり、これが明治十三年（一八八〇年）あたりからおこなわれた自由民権運動に大きな影響をおよぼしたといわれている。しかしこの〈社会契約論〉の邦訳が出版されたのは、奇しくも音楽取調掛が小学唱歌集にもとづく公開の〈大演習〉をもよお

したのと同年の明治十五年（一八八二年）であった。ただし半年以上もあとの九月だったのである。兆民はなお明治十六年（一八八三年）には、〈学問芸術論〉を翻訳出版している。だが、兆民によるルソーの紹介は、自由民権運動、すなわち反政府運動と結びついているものであっただけに、そうした思想色、政治色とはほとんど関係のない世界でおこなわれた小学唱歌の原曲の作曲者の名はおそらくほとんど注意を呼びおこさなかったものであろう。（中江兆民とルソーについては桑原武夫編〈中江兆民の研究〉〔岩波書店〕参照）

ところで、すでに触れたように、〈小学唱歌集 初編〉収録の曲には作曲者や原曲名が記されていない。伊沢修二の〈唱歌略説〉が執筆された理由もそうした点をつまびらかにすることにあった。〈見渡せば〉について、伊沢修二の説明をもう一度ふりかえてみよう。第一点はこの曲の〈楽譜〉が佛国の学士にして音楽に著名なるルーサウ氏（上伊那稿本）に由来することである。さらにそのルソーがこの曲を〈睡眠中夢に作〉ったこと。

第三点はこの曲が〈広く諸邦に行〉なわれていること。

最後に〈其意ハ雅正婉美なる感情を暢ぶるもの〉である点であ

る。

遠藤宏著《明治音楽史考》の第四編〈唱歌篇〉第三章は〈歌曲の戸籍〉と題されている。遠藤氏はここで小学唱歌その他の由来について調査研究の成果を紹介しているが、その最初がほかならぬ《見渡せば》なのである。そこには次のように書かれている。

「ルーソウ J. J. Rousseau が一七七五年に作曲したものであって、各国の唱歌になってゐる。米英にも数種の歌詞がつき、日本では柴田清熙及稲垣千頰が素性法師の歌に據つて作詞したことは既に述べた。酒井勝軍詞歌『花見』と云ふ歌詞もついでゐる（酒井編、新式日本唱歌・第一編三十七年）又童謡風歌詞『結んで開いて手を打って……』がつき現今尚幼稚園等で歌と遊戯が行はれてゐる。」（同書二〇八ページ）

遠藤氏の調査したこの《見渡せば》の戸籍は、具体的にルソーが一七七五年に作曲したというデータを挙げてゐるほか、各国の唱歌になっており、英国や米国でもいくつかのテキストで歌われていると指摘している点で、《唱歌略説》を補足しているものである。とくに一七七五年作曲という具体的な作曲年代の提示は、この《見渡せば》の原曲がルソーの作品であるという事実を確認したという印象を与えたものであった。この遠藤氏の《戸籍調べ》、それに先立つ《唱歌略説》の紹介によつて、《見渡

せば——ルソー作曲》説が定着し、戦前、戦後を通じて広く歌われることになったこの《見渡せば》の旋律による《むすんでひらいて》は、やがて堂々と《ルソー作曲》と謳われることになるのだ。

多くのページ数を費やして、資料的な側面を紹介してきたが、これから、私たちは、伊沢修二が語っている《ルーソウ氏が睡眠中夢に作りたる曲》、この《見渡せば》の原曲の探究に出发しなければならぬ。その前にもうひとつだけ研究文献を紹介しておく必要があるだろう。それは遠山文吉氏の《小学唱歌集》と「唱歌掛図」（《音楽教育研究》第十三巻第五号・昭和四十五年「一九七〇年」五月号。のちに《音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究——》に再録）である。

この研究では《小学唱歌集》三編に収められた歌曲の出典調査がおこなわれている。知られるようにメイスン、伊沢修二を中心に、音楽取調掛が唱歌集を編集する際、さまざまな資料が利用されたものであった。遠山氏は、《唱歌略説》および《明治音楽史》にみられる出典の解説や調査に加えて、メイスンが編集し、かつ来日の折にたずさえてきたと思われる教材集《ナショナル・ミュ

ーミック・チャーツ (National Music Charts) およびナショナル・ミュージック・リーダーズ (National Music Readers) を調べ、これらに収められ、かつ、《小学唱歌集》に取り入れられた曲をチェックし、《小学唱歌集歌曲出典調査表》を作製している。しかしながら、この調査でも、《小学唱歌集 初編》第十三曲《見渡せば》に関するかぎり、伊沢修二の《唱歌略説》にみられる解説、すなわち作曲者「ヘルソウ」ならびに作詞者「柴田清熙、稲垣千顕」以外の情報は、残念ながら得られてはいないのである。

(国立音楽大学)



『幼児の教育』の読者の方々へ

本誌は幼稚園、保育所、家庭、並びに大学、短大などの教育関係者に広く購読して戴きたいと考えていますが、読者から度々次のような声が寄せられます。「幼稚園をやめて家庭に入り、書店を通じて頼んでみるが、なかなか取り寄せてくれない」「結婚して転勤に伴って地方に行き、書店に注文するが、そんな雑誌があるのですかと言われる。注文しても毎号は来ない」等々。

本誌は発売をフレール館に委託しています。フレール館は、幼稚園、保育所を廻って直接に商品売の販売方法を取っています。ですから販売の人が廻って来る幼稚園の先生方には、簡単に入手できますが、家庭に入られた方、学校関係者には入手が困難です。

書店の出版目録には、東販、日販で扱う出版図書しか載っており、本誌は記載されていません。親切な本屋さんなら、フレール館から毎号一冊ずつ取り寄せてくれるでしょうが、利益の薄い安い本誌の手配は、なかなか普通は快くやってくれないようです。

一般書店の店頭に置き、誰でもたやすく入手できるように、これからもフレール館の方へお願いしていきますが、現在のところ確実に入手するのは、フレール館の販売課に直接、通信購読をすることのようです。但し、この方法は毎号郵送されますので送料がかかってしまいます。

《通信購読の方法》

■宛名はフレール館。郵便振替は、東京九一―一九六四〇です。現金書留、為替でも勿論かまいません。

■購読料は、一冊二五〇円、送料二九円の計二七九円です。六か月分位をまとめてお送り下さると幸いだと販売課では言っています。六か月分(送料共)は一、六七四円です。

尚、本誌の購読につきまして御意見や御感想がありましたら編集部宛にお知らせ下さい。